

Design + Technique

Best Equipment

Renewal · Refresh · Reduce

House & Home

# サントリー美術館

設計：隈研吾建築都市設計事務所

D+T

外装ルーバー見上げ 先端を8mmにまで削ぎ落とした「アガトス」を、化粧材と下地材を兼ねたアルミ押出型材で背面から補強するディテールにより実現できた、底辺65×高さ295mmの直角三角形の極薄の「白磁ルーバー」。見付100mmの方立に対して、白磁の垂直面を南面側に片寄せした納まりとなっている



西面全景

## Design + Technique

## 和らかな美術館

弥田俊男  
TOSHIO YADA

東京都心、六本木の中心の地に誕生した巨大複合都市施設、「東京ミッドタウン」。その一角に、超高層棟を背にして、都心の真ん中とは思えない広々とした緑地を前に佇む地上6階の建物。「サントリー美術館」は、3階から最上階となる6階までに、その姿を見せる。

日常の品々の中に美を感じ、生活を楽しんできた日本の心、美意識。日本の古美術を中心に、そんな生活と一体となった美術を、東西、古今にとらわれることなく愉ませてくれてきた、「サントリー美術館」。その新しい姿にふさわしい外装とはどのようなものなのかを考えた。

美術館の展示フロアは3階と4階の2層からなり、5階は事務所フロア、最上階の6階には、前面のテラスと一体となって都心の風景を見渡せるホール、茶室を設けた。しかし、1階と2階には、美術館とは全く無関係な商業テナントが入居する。複合施設に付き物のこのような階構成ながら、美術館として1棟の建物に見える姿を実現したいと考えた。そして立ち現われるその姿は、「東京ミッドタウン」の街並みに調和しながら、人々を美

術館へといざなう印象深いものでありたいと考えた。

辿り着いた解法は、「白磁」の縦ルーバーによる外装であった。それは、白磁の器を手にとって感じるような繊細さを持たなければならないと思った。白磁のイメージは、「サントリー美術館」の収蔵品に通じるものであり、そのやさしい質感は、「生活の中の美」をくつろいで愉しんでほしいという、美術館の姿を表現できると考えた。

この白磁ルーバーを実現できる材料として、さまざまな検証を重ねた末、「アガトス」という素材を見つけ出した。通常はタイルとしてしか施工しない、厚さ13mmのアガトスパネルを、ルーバーとして薄く突き出すために、特注アルミ押出型材に「デュベル工法」を応用した取付けディテールを開発した。白磁の器の繊細さをまとうために、「アガトス」の先端を更に斜めに切り落とし、下地と化粧材を兼ねた6mもの長さのアルミ押出型材で背面から補強している。このディテールと厳重な施工時の精度管理によって、建築のスケールをかけ離れ、白い“線”にまで還元される8mmという見付寸法、根元部分でも55mmという極薄の繊細な縦ルーバーが実現できた。パネルは、高さが最大成形サイズである約1,200mm、幅295mm、厚さ13mmのサイズのもの、基本階高の6mに合わせて割り付けた。白磁の質感にはこだわり抜き、焼成パネルの白さや釉薬の具合がイメージに合うものになるまで、試し焼きを繰り返した。

ルーバーは、この出幅295mmのアガトスパネルを600mmピッチで並べている。この寸法関係は、内部からは、商業テナントと美術館フロアにあふれる緑への十分な眺望を与えるものであり、外観では、位置によって見え方を変えるルーバーが、商業テナントの表情を制御する覆いとなり、あたかも1棟の建物のよう

な姿を「サントリー美術館」に与える。白磁にそっと包まれたその姿は、あふれる緑の中、四季の彩りや一日の移ろいにやさしく応答して、柔らかく豊かな表情を人々に見せてくれるだろう。

美術館の内部も、やさしくつづげる空間を目指した。桐や手漉き和紙、ウイスキー樽を再利用した床、といった柔らかい自然素材を多用し、その寸法も身体に合うヒューマンスケールなものとした。照明も、障子越しに柔らかく室内に行き渡るような、美術品にも人にとってやさしい光で館内を満たしている。

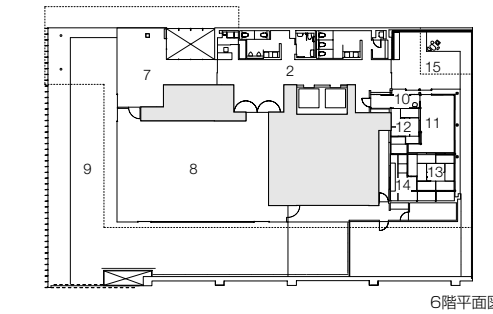
緑あふれる外景に面して、4階から3階への展示フロアを結ぶ吹抜けスペースを設けている。ガラス開口面は桐の“無双格子”が全面を覆い、2つの格子をスライドして、光を遮ったり、開け放って外を眺めたり、展示やイベント、季節によってもいろいろと変わる表情を楽しめる空間となっている。外装の白磁ルーバーは、このスペースに直射光が入ることを極力防ぎながら、その肌合いは陽光をやさしく拡散・反射する。無双格子の透き間から洩れ入るやさしい拡散光は、日の移ろいととも表情を変え、全面和紙貼りの奥の壁に白と影の柔らかな縦縞模様を描き、床や天井に繊細な光の表情を描き出している。\*

やだ・としお—隈研吾建築都市設計事務所 設計室長 / 1974年生まれ。1996年、京都大学工学部建築学科卒業。1998年、同大学大学院修士課程修了。隈研吾建築都市設計事務所入社。主な担当作品：森 / 床 (2003)、東雲キャナルコートCODAN 3街区 (2004)、浜名湖花博メインゲート (2004) など。

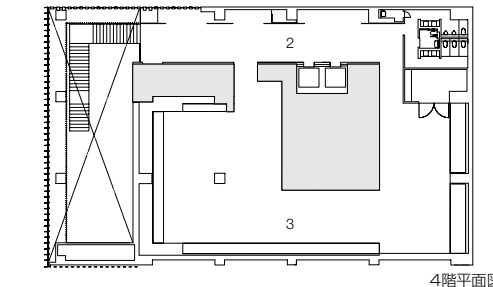
## ■建築概要

名称：サントリー美術館  
所在地：東京都港区赤坂9-7-4 東京ミッドタウンガーデンサイド  
設計：隈研吾建築都市設計事務所+日建設計  
施工：竹中・大成建設工事共同企業体  
延床面積：4,741.01㎡  
規模：地下3階、地上6階  
構造：SRC造、一部RC造、S造  
工期：2004.5～2007.3

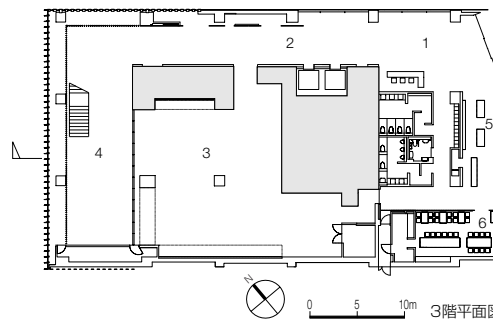
●INAX使用商品 ●AGC-11 / 特注色



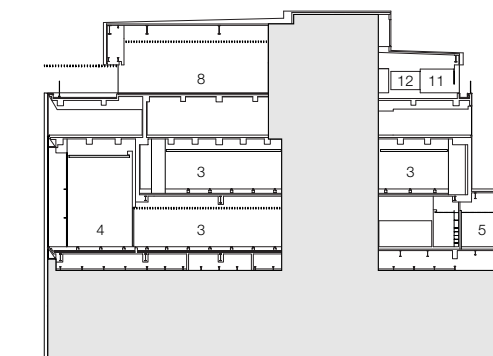
6階平面図



4階平面図



3階平面図

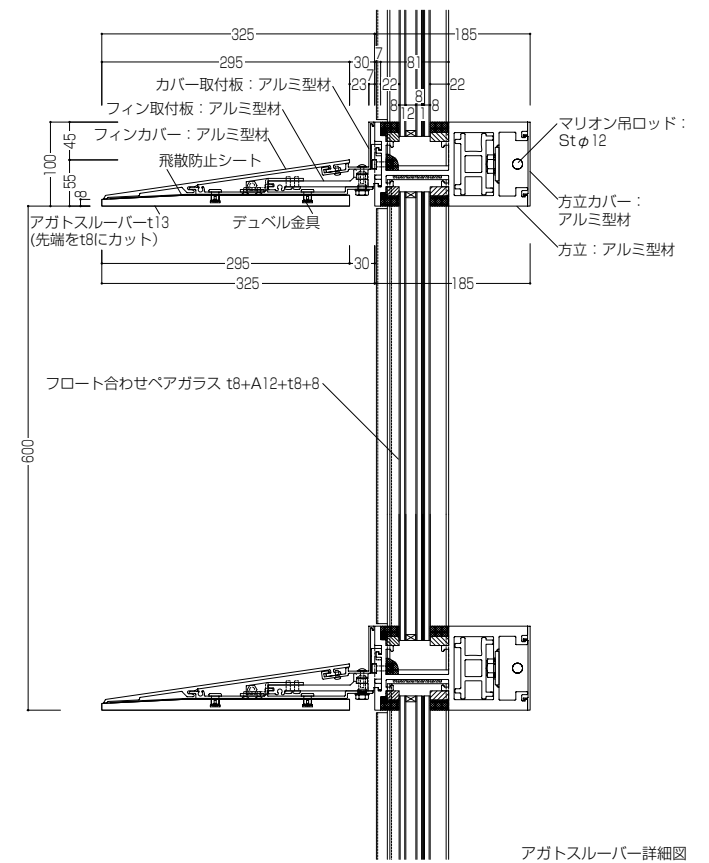


断面図

- 1.メインエントランス
- 2.ロビー
- 3.展示室
- 4.展示室(吹抜)
- 5.ショップ
- 6.カフェ
- 7.メンバーズサロン
- 8.ホール
- 9.デッキ
- 10.露地
- 11.立礼茶室
- 12.小間(四畳半)
- 13.広間(八畳)
- 14.水屋
- 15.茶室テラス



上—吹抜けスペース  
左—南西面外観



アガトスルーバー詳細図